様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８０１５３

研究課題名（和文）江戸・東京の木簡研究の基盤形成

研究課題名（英文）The base formation of the wooden tablets study of Edo and Tokyo

研究代表者
鐘江　宏之（Kanegae, Hiroyuki）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：８０２７２４３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：これまで研究が進んでいなかった江戸・東京の木簡について、木簡学、日本近世史、日本近代史、歴史考古学の各分野の研究者が協力して、継続して研究を推進していくためのネットワークづくりを行った。
木簡は紙の史料とは用途が異なり、紙の史料によってこれまで明らかにされてきた分野とは異なることがらを明らかにできる素材である。江戸時代の木簡を活かした新たな研究の例として、食文化や贈答習慣の一面を明らかにできた。今後も、さまざまな分野に取り組んでいくことが可能である。
また、今後の研究の進展のために、江戸・東京の木簡のデータベースを構築した。これから継続して入力作業を進め、公開を目指したい。

研究成果の概要（英文）：Studies about wooden tablets of Edo and Tokyo did not have gone ahead through. The resercher of wooden tablet, Japan of the early period of modern history, Japanese modern history, archeology about Japan early modern, cooperated, and made the network which we can continue studying.The wooden tablet is different from the historical materials of paper in a use.It is historical materials to be able to make clear the part that was not studied till now.As an example of the new study that we made use of wooden tablets of Edo, we were able to clarify several parts of the food culture and of the exchange of presents custom.We can clarify various fields of Edo in future.In addition, for the development of the future studies, we built the database of the wooden tablets of Edo and Tokyo.We continue input work and wants to aim at the exhibition from now on.

研究分野：日本の木簡研究および日本古代史

キーワード：木簡　江戸　東京

１．研究開始当初の背景

日本における木簡研究の状況は、奈良文化財研究所を中心とした古代の奈良時代の木簡についての研究が多く蓄積されているが、実際に出土している事例は近世の江戸時代の木簡のほうが多い。しかし、近世木簡の研究は、ほとんど手がつけられておらず、豊富な点数の資料に目が向けられないままになっていた。近年、東京都内の開発の進展に伴い、江戸時代の都市江戸の遺跡から木簡が多く見つかるようになっている。近世木簡の研究を始めるにあたっては、まず江戸の遺跡で出土した木簡群に絞り込んで始めることが有効であると考えられる。

江戸時代史の研究においては、紙の文書によって残された記録史料が大量にあり、研究者はまずそれらの紙本の文書を対象とした研究に取り組む傾向にある。このため、江戸時代の研究において木簡がとりあげられることはほとんどなかった。その一方で、発掘調査によって出土した遺物のうち、文字の記されたいわゆる出土文字資料は、発掘を担当した考古学研究者によって整理されてきている。古代の木簡については、古代の文献研究者が釈読から内容解釈に至るまで、深く関わる関係が各地で構築されており、この点は近世の木簡においてはまったく異なった状況となっている。近世の出土文字資料は、木簡を含めてさまざまな出土文字資料のすべてを、基本的には考古学研究者がまとめて扱っている。

古代の木簡の場合には、考古学研究者だけでなく筆文字の釈読に熟達した文献史学の研究者が関わることによって、より正確な釈読が目指され、また内容の検討を踏まえた個々の資料の理解が進められてきた。近世の木簡の場合には、そのような文献史学の研究者の関わり方があまり積極的には見られなかったが、それは上記のように紙本の史料を中心に取り組まれてきたこと、また紙本の史料がなお膨大に残されていることが、大きな要因である。

しかしながら、古代の木簡を中心に明らかにされてきた事実として、木簡と紙の文書とでは使われ方に違いがあり、分析によって明らかにできる内容にはおのずと違いがある（鐘江『地下から出土した文字』、2007 年、山川出版社）。古代の木簡に取り組んできた研究者は、こうしたことを踏まえて古代の社会を分析し考察してきたが、しかしこのような視点をもった古代の木簡の研究者は、近世の木簡を研究対象として取り組むことまではしてこなかった。古代の木簡を主として題材としてきた木簡に対する認識の深化は、まだ近世木簡には向けられておらず、木簡による当該時代考察の視点は、江戸時代史研究にはほとんど反映されないままとなっていたと言えるだろう。

これまで、木簡研究および日本近世史研究がこのように展開してきたという経緯があり、現在に至るまで、近世木簡の研究にはなかなか手がつけられないまま放置されてきたのである。

さらに、東京都内の江戸時代の遺跡では、その後の明治時代の層位からも木簡が見つかっている例があり、江戸時代と同様に明治時代の東京の社会を明らかにしていく好材料が存在する。こうした事例も、近世史研究と同様に紙本の史料が膨大に存在する日本近代史研究の分野では、これまで取り扱われてこなかった。

近世・近代の木簡は、以上のような研究状況にあり、新たに研究に取り組むことによって、歴史上これまで光の当てられなかった部分を明らかにすることのできる有用な史料であることが理解されないままになっていた。

２．研究の目的

本研究の開始にあたって、大きく分けて２つの目的を設定した。

第１の目的は、江戸時代・明治時代の遺跡で発掘調査によって出土した木簡について、現状では研究がほとんど始められていない状況を打開し、研究を推進するための中心となる組織づくりをすることである。木簡学・日本近世史・日本近代史・歴史考古学の研究者からなる研究組織（研究グループ）を立ち上げるとともに、協議を重ねながら、研究組織として今後どのように拡大した体制を目指すべきかを検討していくこととした。

第２の目的は、江戸時代から明治時代の木簡の研究によって、どのようなことが明らかになるのかという点について、わかりやすい事例研究を公表することである。こうした事例研究によって、近世・近代の木簡が歴史研究にどのように大きく役立つのかが広く認識されるようになり、その史料的価値への評価が高まるようになれば、近世・近代木簡を取り巻く状況も変化していくだろう。こうした目的をもって、研究者や社会に広くその歴史的価値を訴えてゆきたいと考えた。

３．研究の方法

研究の推進のために、以下の(1)(2)(3)ような方法について取り組んできた。

(1) 研究組織（研究グループ）の立ち上げ

木簡学・日本近世史・日本近代史・歴史考古学の分野の研究者による研究組織（研究グループ）を立ち上げた。木簡学に携わってきた研究者の中でも、幅広い時代の木簡に関心を持ってきた鐘江・佐藤の２名が中心となり、江戸時代の研究の中において木簡資料がどのような位置づけを与えられるのかという点について、日本近世史を幅広く視野におさめて研究している高埜が、また遺跡からの出土例が集中する江戸の武家地についての研

究を行ってきた岩淵が加わった。さらに、明治時代の東京の木簡については、日本近代史において広く史料調査に携わってきた千葉が加わった。当初はこの５名で研究組織を開始したが、近世の文字資料に関連する形で歴史考古学に取り組んでいる石神に連携研究者として加わってもらうことにより、文献学のみでなく、出土した考古資料としての近世・近代木簡への視点を加えて組織として理解を深める体制を整えた。この研究メンバーを中心に年に３～４回の会合を持ち、必要な意見を求める外部の研究者を招くこともしながら、組織作りの方向性と、継続的な研究のために必要なことがらの検討を行ってきた。会合においては、発掘調査現場の担当者を招いて直接に現場の意見を述べてもらうとともに、研究グループのメンバーで東京都中央区の文化財整理室を訪問して、木簡の整理と保管の状況を見聞し、東京都区内の木簡資料のおかれている現状について、認識を深めることができた。

なお、研究補助に協力してもらった大学院生の中からも、近世木簡に関心を持って扱ってくれる研究者が育ちつつある。

(2) 事例研究によって江戸時代・明治時代の木簡研究の意義を示す

今後の研究組織の発展や、広く社会的に近世木簡に関心が持たれるようになるためには、できるだけわかりやすい事例を扱った研究成果を示すことによって、研究の意義が広く認識される必要がある。江戸時代から明治時代にかけて、日本の中心でありつづけた都市である江戸・東京には常に関心が寄せられており、江戸・東京の木簡資料についても、その研究から明らかにできる内容によって、社会から大きな関心が寄せられるものと考えられる。

事例研究としては、まず端的な例として食料品容器の曲物の蓋の資料を扱った。全国の出土木簡の中から、比較的分量のあるものとして、納豆容器の蓋としての墨書のあるものを抽出し、その特徴について考察した。これらの墨書には地域的な特色もあり、江戸の事例が最も多いが、さらに事例が増えることも期待できる。さらに、それら以外の食料品容器の蓋の事例と比較し、容器そのものの特質と内容物による特徴などを検討した。

(3) データベースの構築

江戸・東京木簡の研究上の難点として、各々の木簡資料について調べるためには、発掘調査報告書に個別にあたらなければならず、またそれぞれの報告書も様式が不揃いで、資料の情報を得るのに大変手間がかかることが挙げられる。個々の木簡の持っている情報を、できるだけ共通した形で一覧できる仕組みを構築することが、今後の研究進展のためには有用であり、長期的展望に立ったデータベースの構築を行うことにした。個々のデータ入力のフォーマットについては、石神が中心になって試案を設計し、研究グループ内で検討を重ねた。その後、この案に基づいてアルバイトの研究補助者に入力作業をしてもらいながら、改善を試みている。

４．研究成果

上記３の研究方法のうち、(2)の事例研究と(3)のデータベースに関する成果を、学会報告および論文によって公表した。

(1) 事例研究について

墨書された食料品容器の蓋の事例を集成し分析することによって、江戸時代に発展した食文化と、授受される贈答品に関わる習慣や方法の一部を明らかにすることができた。こうした木材を使った容器の使用とその利用に際して墨書される記述は、他の文献史料からうかがうことの難しい分野であり、まさに木簡によって、それまで知られなかったことがらの様々な部分が明らかになる好例である。これらの点を鐘江がまとめて学会報告を行い論文にして公表した。

今後も、近世・近代の木簡から明らかになるさまざまな分野のうち、広く社会的に関心を持たれるであろうテーマに照準を絞って、わかりやすい成果を公表し、江戸・東京の木簡の資料価値について訴えていく必要がある。本研究の期間のうちに、次に取り組む事例研究としてどのようなものがよいかを、研究組織内で検討することができた。今後この検討を踏まえていくつかの事例研究を発展的に進めていく基盤が、形成できたと考えている。

また、鐘江が行った学会報告や論文においては、近世木簡の研究の発展によって、古代の木簡だけでなく中世木簡の研究が活性化し、ひいては日本の木簡文化の通時代的検討が可能になることを訴えたが、これによって学界内で関心が持たれ始め、今後に協力を得る機会が増えると期待できる。

(2) データベースについて

近世木簡のデータベース設計における注意点とその意義について、石神が要点をまとめて学会報告と論文公表を行った。考古学的検討の対象となる遺物の中でも、木製品は多様な分類がなされており、近世においてはさまざまな木製品に墨書がある。これらは、すべて木簡の範疇に含めて考えられるが、各製品の分類ごとの用途と墨書のあり方との関連など、また木製品以外の出土文字資料との関係など、論点は多岐にわたる。そうした今後の論点を予想しながらデータベースの入力項目を設定した点について、報告と論文において示すことができた。

また、この方針に基づいて設計したデータベースについて、実際の入力作業を開始した。資料点数が多くすでに報告書の刊行されている『汐留遺跡』を最初の対象遺跡とし、入

力を試行しながら、データベースの仕様を改善していった。さらに、都区内で最も木簡の出土点数が多い中央区のデータを網羅的に入力する作業にもとりかかっており、いくつかの報告書についてはすでに済ませている。現段階ではまだ公開する規模には及んでいないと判断されるが、今後も継続して入力作業を進め、公開できるように準備を整えたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 鐘江　宏之、江戸・東京の木簡の現状と近世木簡研究の課題、木簡研究、査読有、37 号、2015、193―208

② 石神　裕之、江戸・東京木簡データベースの構築とその課題―近世木質遺物の研究動向を踏まえて―、木簡研究、査読有、37 号、2015、209―224

〔学会発表〕（計　２件）

① 石神　裕之、江戸・東京の木簡データベース構築に向けた課題、木簡学会第 36 回研究集会、2014

② 鐘江　宏之、江戸・東京の木簡研究の現状と課題、木簡学会第 36 回研究集会、2014

６．研究組織

(1)研究代表者
鐘江　宏之（KANEGAE,Hiroyuki）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：　８０２７２４３３

(2)研究分担者
高埜　利彦（TAKANO,Toshihiko）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：　９０００２２５４

佐藤　信　（SATOU,Makoto）
東京大学大学院・人文社会系研究科・教授
研究者番号：　８０１３２７４４

岩淵令治　（IWABUCHI.Reiji）
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授
研究者番号：　９０３００６８１

千葉　功　（CHIBA,Isao）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：　５０３２７９５４

(3)連携研究者
石神裕之　（ISHIGAMI,Hiroyuki）
京都造形芸術大学・芸術学部・講師
研究者番号：　１０４５８９２９